



人権作文の部

いろんなくにをしりたいな……………	2
いっしょにあそぼう……………	4
ゆうきをだして……………	6
「だいじょうぶ」のことば……………	8
してはいけないこと……………	10
休み時間……………	12
「人けん」ってどういう事だろう……………	14
話したいな……………	16
みんなちがってもいい……………	18
ラインの使い方……………	20
チクチク言葉とフワフワ言葉……………	22
わたしのお兄ちゃん……………	24
世界に一つのスタンプ……………	26
みんなが過ごしやすい町へ……………	28
ほほえみは共通言語……………	30
優しさと理解の輪……………	32
ひいおばあちゃんの戦争体験から……………	34
悪ふざけ……………	36
あの時の僕……………	38
障がいのかべをこわす……………	40
つらい経験から学べたこと……………	42
私の吃音とみんな……………	44
差別をなくすために……………	46
障がい者差別について考える……………	48
想像することの大切さ……………	50
特別視しないということ……………	52
トランスジェンダーと差別について……………	54

いろんなくにをしりたいな

「こんど、このクラスにてんこうせいがきます。

がいこくからくるおともだちだよ。」

と、かえりのかいで、せんせいがいました。わ

たしは、

「えーっ。やったあ。」

と、みんなとよろこびました。そして、「おとこのこかな、おんなのこかな。がいこくからってどんなこかな」と、わくわくたのしみなきもちでいっぱいになりました。

わたしは、おおいたのほかは、くまもととあきたはしってるけどがいこくは、わかりません。せんせいも、

「にほんじゃなくて、アメリカやフランスってき

いたことある。」

と、たずねたので、

「きいたことある。」

と、こたえました。すると、ともだちが、

「ぼく、えいごをちょっとはなせるから、ともだちになれるかも。」

と、いいました。わたしも、こころのなかで「オレンジヤアップルや、ワン、ツーってすうじをいえる。だから、きっとなかよくなれる」とおもいました。

てんこうしてきたAくんは、ネパールというく

にからきた、おとこのごでした。わたしよりも、
いろがくろくて、ピアスをしていたので、ちよっ
とびっくりしました。Aくんは、にほんごがわか
りません。だから、どうやってはなせばいいのか
などちょっとごまったけど、せんせいが、

「ごとはがはなせなくても、みんなが、やって
みせてあげて。つれていってあげて。そうやっ
て、やさしくおしえてあげたら、だいじょうぶ、
きつとつたわるよ。」

と、おしえてくれました。わたしは、ゆびをさし
ておしえたり、てをつないであんないしたり、や
りかたをみせてあげたりしました。そうしたら、
どんどんおぼえて、いっしょにおとぅばんやそぅ
じができるようになったのでとってもうれしかっ
たです。

Aくんは、たった一しゅうかんで、じぶんのな

まえをかけるようになりました。ときどき、はし
もつかうようになりました。どんどんにほんのこ
とをおぼえていってすごいなとおもいます。

わたしも、がいこくのことをしりたくなりました。
た。しらべてみたくなりました。いろんなく
に、おともだちができたなら、すてきななとおも
いました。そして、いつか、そのおともだちのく
にもいってみたいです。

いっしょに遊ぶぼう

ぼくはにゅうがくしきのひ、とてもドキドキしていました。それは三ねんかんかよったごどもえんから、おなじしょうがっこうににゅうがくするともだちが、ひとりもいなかったからです。

にゅうがくしきがはじまるまで「だれかともだちがいっしょだったらいいのにな」「ともだちができるかな」「なんだかさみしいな」とおもっていました。

ぼくは、にゅうがくしきのつぎのひ、ドキドキしてすわっていると、となりのせきのおとこのこが、

「ともだちになろうよ。」

といてくれました。とてもうれしかったけど、ぼくははずかしくて

「うん。」

とちいさなこえでへんじをしました。

はじめは、そのともだちとあそぶのもドキドキしました。いっしょにトランプやすごろくをしました。あそんだらどんどんたのしくなりました。しょうがっこうではじめてできたともだちです。それからまいにちなかよくあそんでいます。ほかのともだちも、

「いっしょにあそぼう。」

とやさしくさそってくれました。うれしくていっ

ろがポカポカしました。ぼくは

「いいよ。」

とげんきにいました。さそってくれて「うれし
いな」とおもいました。

だからぼくもともだちに

「いっしょにあそぼう。」

といてみました。そしたら、ともだちはにっこ
りして

「ありがとう。」

といてくれました。いったぼくも、にっこりし
たかおになりました。

にっこりしたかおであそぶと、いつもよりとっ
てもたのしかったです。

一がっきがおわるときには、クラスのみんなと
ともだちになりました。いまは、しょうがっこう
にもごどもえんのときとおなじくひらひら、たくさん

のともだちがいます。だからまいにちがっこうに
いくのがたのしみになりました。

これからも

「いっしょにあそぼう。」

をたくさんいって、みんなでなかよくあそびたい
です。

ぼくもともだちもにっこりしたかおであそん
で、もっともっとにっこりしたいです。ぼくはや
さしいともだちがだいすきです。

ゆうきをだして

わたしがほいくえんのとくに、「それはどうなのかな」とおもったことがあります。それは、いやなけんかをみたときです。

さいしょは、一人たい一人のけんかでした。

「なかまにいれて。」

といった人にもう一人が

「だめ。」

とっておきたけんかでした。いわれた人は、

「なんで?。」

とりゆうをきいたけど、りゆうをいわなかったのでけんかになってしまいました。どうなるかなとおもって見ていたら、どんどん人がきて、ふしぎ

なことに「だめ」といった人のほうばかりみかたをしていました。そして、いつのまにか、一人たいたくさんの人のけんかになっていたのです。それをみて、

「じぶんもされたら。」

と、とてもしんばいなきもちになりました。なんと、一人たい一人のけんかなのに、たくさんの人が一人のみかたをするのかなとふしぎにおもいました。ふしぎにおもったからこそ、このけんかをとめないといけないとおもいました。

そのとき、一人だけになったおともだちのかおをみてみました。にらんでいるような、おこって

いるような、そんなかおをしていました。わたしは、みているだけでとてもいやなきもちになりました。

「一人にむかって、そんなにいっぱいの人でいってはいけない。」

そうおもったわたしは、あつまっていたともだちに、

「そんなことしてはいけないよ。」

と、こえをかけました。さいしょは、

「なにもとめんでいいし。」

といわれてしまいました。でも、それはいけないことなんだよとなんともいいつつげたら、一人だけわたしのはなしをきいてくれる人がでてきました。その人がみんなにこえをかけてくれたおかげで、すこしずつわたしのはなしをきいてくれる人がふえていきました。ふえていくことではなしあ

いができ、じかんはかかったけどちゃんとかいけつすることができました。さいごは、けんかをしていた人たちであくしゅをしてなかなかおりができ、みんなですなおに、

「ごめんなさい。」

をいったあとは、みんなでにこっとわらいあうことができました。それをみてわたしはうれしくなりました。

これは、ほいくえんでのことで、いまのクラスではおきたことはありませんが、もしおなじことがあったら、もういちどこえをかけて、とめたいです。そして、じぶんもおなじことをしないようにしたいとおもいます。

「だいじょうぶ」のことば

わたしは、「だいじょうぶ」のことばの大切さ
をかんじたことがあります。

わたしが体いくかんに行くときに、おいてあつ
たホワイトボードに足がひっかかりました。その
ときに、同じ二年生のお友だちが、

「だいじょうぶ。」

とこえをかけてくれました。

こけていたかったけど「だいじょうぶ」とお友
だちが言ってくれたので、ちょっといたみがおさ
まった気がしました。

どうして、いたみがおさまった気がしたか、ふ
しぎに思いましたが、たぶん、「だいじょうぶ」

と言われて、うれしい気もちやあつたかい気もち
をかんじたからだと思います。

これから、お友だちにあつたかい気もちややさ
しい気もちをかんじてほしいと思います。そのた
めには、どんなときに、どんなことばをかけたら
いいのか考えました。

できなかつたことをできるようになったとき、
「すごいね」と言われると気もちがふくらんでく
る気がします。

しんけんに、スポーツをしているとき、「がん
ばって」と言われると、もっとがんばろうと思ひ
ます。

休み時間に、あそぶあいてがいないとき、「いっしょにあそぼ」と、こえをかけてくれたとき、ほっとしてうれしい気持ちになります。

「だいいじょうぶ」のよつばのようにあったかい気もちやさしい気もちになるよつばは、まだまだいろいろあると思います。

わたしは、「だいいじょうぶ」や「すいね」、「がんばって」などのよつばを、お友だちにたくさんかけていきたいです。

fight!



してはいけないこと

どうとくで、「くつかくし」というお話を読みました。くつかくしをしてはいけないりゆうを考
え、みんなで話し合いました。わたしは、くつを
かくされた人が、かなしくなって、ないてしまう
から、だめだと思いました。それに、「だれがこ
んなひどいことをしたのかな」「○○さんじゃな
い」など、言い合いをしたら、けんかになる
かもしれないし、みんながこまるからいけないと
思いました。

クラスのとちが、「じぶんもこまる」とい
ういけんを出したので、みんなで、どうしてじぶ
んもこまるのか考えました。わたしは、もしこの

ことで、みんながうたがいだしたり、言い合いを
しだしたりしたら、いやな空気になってしまい、
もうしわけない気もちになるからだと思いまし
た。それに、くつをかくされた人もまわりの人も
こまっているのに、だまっているのは、じぶんの
心もすっきりしないと思いました。

してはいけないことをしたら、みんながいやな
気もちになって、された人はきずつくので、ぜっ
たいにしてはいけないと思いました。

くつかくしのほかに、してはいけないことは
たくさんあります。たとえば、いじわるをする、
ひとりぼっちにする、おす、たたく、体そうぶく

をかくすなどです。いっしょにあそぶともだちを
うばったり、なにもしていないのに、

「○○ちゃんが△△した。」

と、いやなことを言ったりすることもしてはいけ
ません。

これらのことは、すべて、じぶんがされていや
なことです。それは、ともだちがされても同じで
す。いやなことをされて、「いや」と思うのは、
せかい中どんな人も同じでしょう。でも、まわり
には、いやなことをする人がいます。じぶんは、
どっちでしょう。いやなことをされている人をた
すける人ですか。それとも、いやなことをする人
ですか。それをきめるのは、ほかの人ではなくて、
じぶんです。もし今、じぶんがいじわるをしてい
ても、だいじょうぶ。今だったら、かえられます。
もしそんな人がいたら、大人になる前に、今すぐ

かえてほしいです。



休み時間

わたしは、外であそぶことが大好きです。一人であそぶより、ともだちとあそぶほうがなんばいも楽しくて好きです。一年生になってからは、ドッジボールや長なわをして、なかよくあそんでいます。

休み時間になってから、わたしが、

「いっしょにあそぼう。」

と、さそったり、ともだちに、

「いっしょにあそぼう。」

と、さそわれたりして、いつもあそんでいます。

なかよしのともだちや、クラスのとみだちとあそんでいると、あせをびっしょりかいてほっぺたが

赤くなるくらい、むちゅうになってあそんでしまいます。ともだちがいるから、毎日学校も楽しいです。

でも、ともだちにおこってしまったこともあり、ます。どうしてかというと、ともだちとやりたいあそびがちがっていて、いけんが合わなくて言い合いになったからです。

その日、わたしは、ゆうぐおにがしたかったので、

「今日は、ゆうぐおにがしたいなあ。」

と、ともだちに言いました。すると、ともだちはいやそうな顔をして、

「えー。なんでかってにきめるの。」

と、すごしつよい言い方で言ってきました。

いつも楽しくあそんでいるのに、なかなかあそびがきまらなくて、休み時間がどんどんみじかくなっていきました。だんだんイライラしてきて、いやな気もちになりました。わたしは、あそびをかってにきめたわけではなくて、じぶんのしたいあそびをつたえてみよう、楽しい気もちで話しかけてみただけでした。いけんが合わなくて、けんかをしてしまいそうになりました。

そこで、なかよくあそぶために、ともだちとやくそくごとをきめました。

「つ田は、「ちくちくことばを言わない」というやくそくです。いやなことばをつかうと、話し合いができないからです。」

くです。じぶんがしたいあそびではなくても、ジャンケンや話し合いをして、ゆずり合ってあそべるようにするためです。

やくそくごとをきめてからは、なかよく楽しくあそべています。いやな気もちをがまんしないできちんと話し合って、やくそくごとをきめてよかったと思いました。

これからも、じぶんの気もちをともだちにつたえたり、ともだちの気もちをうけ入れたりして、おたがいに思いやりをもってすごしたいです。そして、いつでもなかよくあそびたいです。

あしたは、どんなあそびにきまるか楽しみです。

「人けん」ってどういう事だろう

「人けん作文」って、何を書いたらいいんだろう。 「人けん」って、どういう事だろうと、考える事からはじめました。

なんとなく大切なことだとは、わかるけど、はつきりとは、わからないので、インターネットで調べてみることにしました。すると、「一人一人が思いやりと、やさしさの心を大切にしていじめのない楽しい毎日を過ごすこと」と、書かれているのをみつけました。「そういうことなんだ」と、わたしの心にひびきました。そして、一年生のころのことを思い出しました。

わたしが一年生のころ、お友だちから、いやな

あだ名でよばれるようになりました。

「そのよび方やめて。」
と言っても、やめてくれませんでした。

はじめは、一人のお友だちだけがよんでいたのに、ほかのお友だちも、いやなあだ名でよぶようになりました。とても悲しい気持ちになりました。

休み時間、そのお友だちと遊ぶとあだ名でよばれるので、外で遊ぶのがいやになりました。家に帰ってから学校のことを考えると、おなかや頭がいたくなるようになりました。先生にこんなことを話していいかわからず、ふ安でなかなか話すこ

とができませんでした。一ヶ月くらいたって、思
い違って先生に話すことができました。

先生と、そのお友だちといっしょに、お話をし
ました。いやなあだ名でよばれて、やめてほし
かったのに、やめてもらえなくて悲しかった気持
ちを、お友だちに話しました。すると、お友だち
があやまってくれました。それから、なかよし
のお友だちになりました。

わたしは、先生に話すまでに時間がかかってし
まったけど、みんなには、こんなことがあったら
すぐに先生に話して、いやな気持ちをすぐになく
してほしいです。早く言わないとお友だちもやっ
たことを忘れて、いいや気持ちに気づかないまま
かもしれないから、早く話すほうがいいと思いま
す。

もう、こんないやな思いを、ほかの人にはして

ほしくないです。

元気がないお友だちがいたら、「どうしたの」
と話しかけることを心がけています。これからも
続けていきたいです。

そして、「いじめのない楽しい毎日」をすごし
たいです。

話したいな

ぼくは今、手話にきょうみをもっています。

ろう学校のAくんが、ぼくのクラスに来て、手話を使ったのを見たのがきっかけです。

Aくんは、同じ校区に住む三年生です。きよ住地校交りゅうというところで、学期に一回、〇〇小学校に来て、いっしょにじゅぎょうをうけています。

ぼくたちは、この日、四時間じゅぎょうをいっしょにうけ、中休みはケイドロをして遊びました。

Aくんは元気そうで、ふつうにしゃべれています。べん強がよくわかっていて発表もたくさん

していました。ぼくには、音が聞こえているような感じがしました。

ぼくは、そっと耳をふさいでみました。Aくんの気もちに近づける気がしたからです。音が聞こえない世界は、とても不自由でいやだなと思いました。明るく楽しそうにしているAくんはすごいなと思いました。

Aくんが手話を使ったのは、おわかれの時でした。さりげなく使う様子にびっくりしました。でも、その時ぼくは、手話で何を話しているのかわかりませんでした。Aくんの先生は、手話でありさつをしてくれたけど、Aくんが手話ができると

は思っでなかつたので、おどろきました。

「どうやったらAくんとお話できるかな。」
と考えました。

そして、Aくんが、二学期にまた来てくれるまでに、手話をべん強してみようと思いつきました。

さっそく、図書館に行って手話の本をさがしました。手話のやり方が書いてある本をかりました。いろんなあいさつの仕方がのっけていて使えそうでした。やってみるとかたんで、六ごろくらいおぼえました。何人か、他にも手話の本をかりた人がいました。

昼休み、手話の教え合いをしました。手話にきょうみをもっている人が、けっこういることに気がつきました。

手話について調べてみると、耳の聞こえない人

と話をする方ほうは、手話だけではなくいろいろな方ほうがあることがわかりました。

身ぶり手ぶりですたえたり、紙に書いてつたえたり、口を大きく動かしてつたえたりなど、言葉ですたえるい外にも、たくさんの方ほうがあつておもしろいなと思ひました。

そして、言葉ですたえる人、手話ですたえる人、いろいろな人がいるけど、話をする人のことを思いやりながら、つたえることが大切だなと感じました。

ぼくはまだ、手話を少ししかできないけど今どAくんが来てくれた時は、ぼくの方から話しかけて、もっともつとなかよくなりたひです。

みんなちがってもいい

わたしは、外でいっぱいあそぶので、日にやけています。はだの色が黒くなっていきました。

また、手や足にも、毛が生えていきました。さいしょは、毛が生えることをきにしていませんでした。

ある日、おとうさんから毛をそれと言われました。わたしは、さいしょなんて言っているのかなと思いました。わたしは、おとうさんも生えているのにどうしてわたしにそんなことを言うてくるのかなと思いました。

お父さんに、

「女の子だから、毛が生えてない方がいいよ。」

と言われました。

それでわたしは、

「毛が生えていても、おかしくないんじゃない。」と言いました。

その理由はいろんな人がいてもおかしくないと思ったからです。世界には、しょうがいがある人やいろいろな色のかみの人や、めがねをかけている人かいてない人、いろいろな言葉、たくさんの人がくらしています。女の人や、男の人や、子どもや、赤ちゃん、おじいちゃん、おばあちゃん、たくさんの方がいっしょに生きています。だからわたしは、毛が生えていても、生えてなくて

も、色が黒くても白くても、みんなちがっていい
と思いました。

その話を聞いていた、おかあさんが、

「○○ちゃんの言うとおりだよ。」

と言いました。そして、

「自分の意見を言えて、えらいね。」

と、言ってくれました。

一方で、その後自分の毛のことが少し気になる
ようになりました。その時、相手に言った言葉
が、その人の心をきずつけることをしりました。
自分がされていやなことは、人にしないようにす
ることにしました。

わたしは、いろんな人がいて、おたがいにそれ
ぞれのもっているものを大切にすることが大事だ
と思います。わたしは、これからも自分のことを
大切にしようと思います。そうすれば人のことも

大切にでき、相手をきずつけないと思います。他
には、自分の気もちを人につたえることが大切だ
と思います。何でもつたえていいわけではなく、
言われた人の気もちも考えてつたえたいと思いま
す。

これからも、いろんな人とみとめあいながら人
を大切にしていきたいと思います。

ラインの使い方

ラインは、人と人がやりとりをするために多くの人に利用されているアプリだ。今では、小学生にも、スマホやタブレットを持つ子が多くなり、ラインやゲームで友だちとやりとりをしている。

わたしも、友だちとラインを交かんしている。いつも遊ぶやくそくや、何をして遊ぶかなどをラインでやりとりしている。はなれていても会話ができるから、とても便利だと思う。

ある日、いつものようにラインをしていたら、「自分のきらいな人をラインに書いて。」と送信がきた。

そんなラインがきたのは初めてだったのでわたしは、その送信をうたがった。どうしていいかわからず二十分くらい返信できなかった。わたしは、「どうし

てこんなメッセージを送ったのだろう、どんな気持ちでこの言葉がでてしまったのだろう」と、ぎもんに思った。そして、

「そういうのはやめた方がいいよ。」と返信した。なぜなら、もしわたしがきらいな人を教えると、その人がどうなるか心配だったし、何よりその人がきずつくだろうと思ったからだ。

わたしがラインの返信をしてからすぐにまたラインがかえってきた。

「オケ（OK）。」と、軽い気持ちでやったように感じる内容だった。わたしはびっくりした。そんな軽い気持ちでやっているとは思わなかった。

もうこのやりとりが続かないと思うと安心したけれ

ど、もしわたしがきらいな人を教えていたら、どうなっていたのかこわくなってきた。「わたしはそういう人にはなりたくない」心からそう思った。

たとえば、どんなになかがよい人でも、だれかをきずつけたりすることはゆるされない。人がきずつくことや人をバカにすることはダメだと思う。なかがよくても、おとなでも、そんな人は信用されない。また、そのようなラインがきたらしっかりとダメだと伝えたい。そして、ちゃんと話し合って、やっていいことと、やってはいけないことがわかる人であってほしい。

今、日本だけでなく、世界中でラインのようにはなれていてもやりとりができるアプリが使われている。べんりなのはいいことだが、それによってきずついている人がいるのも事実だ。ニュースでたまにこんなことがながれてくる。

「SNSでいやがらせをうけたために、自殺してしまった。」
という内容だ。

とく名だからといって、会ったこともない人たちが

ら悪口を言われたり、いやがらせをうけたりしているのだ。わたしは、とてもこわいと思う。

たぶん、そんなことを送信している人たちは、軽い気持ちで送信しているのだと思う。送信された人がどんな気持ちになるのかを考えていないのだ。

でも、そんな軽い気持ちでも、送信された人はどんなにきずつくだろうか。不安な気持ちになるにきまっている。

わたしは、ラインを使っているけれど、使い方には気をつけようとあらためて思った。相手が見えないからこそ、気をつけて利用しなければならぬと思う。わたしはまだ小学生だから、これからもっとラインをする友だちがふえると思う。まちがっていることをしていたら、

「やめた方がいいよ。」
と言える人になりたい。みんなが気持ちよくくらししていけるような世の中になっていけばいいと強く思う。

チクチク言葉とフワフワ言葉

みなさんは、チクチク言葉を言ったことがありますか。チクチク言葉とは、人にむかって言う言葉の中で言われてきずつく言葉を言います。悪口がこれにあたります。ある時、わたしの友だちが言い合いをしていました。ケンカをしたいきおいだと思います。ひどい言葉を言っていました。それを聞いたわたしは「そんな悪いことを言ったら友だちがいなくなったり、ひどいことを言われた友だちがもう学校に来ないこともあるかもしれないのにな」と思いました。もし、わたしが友だちにチクチク言葉を言われたら、とても悲しいです。チクチク言葉は、言った方も言われた方もとてもいやな気持ちになる言葉だと思います。

チクチク言葉ではありませんが、わたしはヒソヒソ話もきらいです。この前、わたしはなかよしの友だ

ち六人で遊んでいました。すると二人がこっそりぬけ出して、向こうの方で二人でヒソヒソ耳元でしゃべっていました。それを見た四人は、何を話しているのか気になり、いやな気分でした。結局、次の日は六人ではなく、四人と二人にわかれて遊ぶことになってしまいました。べつべつに遊ぶより六人で遊んだ方がおにごっこをしても楽しいし、気分も晴れます。友だちがばらばらになってしまって、わたしはとても悲しかったです。ヒソヒソ話の内容は何でもない事で、チクチク言葉ではないかもしれませんが、でも、ヒソヒソ話もされると、とてもいやな気分になります。わたしの目の前でヒソヒソ話をされたら、「はあ」とため息が出ます。自分がされたらとてもいやなので、友だちも同じようにいやな思いをしたいと思います。だから、わた

しはヒソヒソ話をぜったいにしないようにしたいです。

チクチク言葉の反対に、フワフワ言葉があります。フワフワ言葉とは、言われてうれしい言葉であり、言ってあげるとよるこんでもらえる言葉です。わたしが友だちに言われてうれしかったフワフワ言葉は、学校でピアノをひいた時に、

「うまいね。すごいね。」

と、言ってくれたことです。このほかに、かみ型や洋服を、

「かわいいね。に合ってるよ。」

と、言われたこともとてもうれしかったです。

でもある時、

「頭良いから教えてあげたらいいやん。」

と、強い言い方で言われた時は、「頭が良い」はフワフワ言葉でうれしいはずですが、いやな気持ちになりました。言い方によっておしつけられるように感じるものがわかりました。このことで、フワフワ言葉も言い方によってチクチク言葉に変わるんだなと思いました。

これまでのけいけんから、わたしは、チクチク言葉やヒソヒソ話など、自分がされていやだと思ふことは、周りの人にしないように気をつけたいと思います。反対に、自分が言われてうれしい言葉や言ってあげると友だちが笑顔になるフワフワ言葉をたくさん使ってきたいです。そして、フワフワ言葉も言い方によって、チクチク言葉に変わってしまうと言ふこともわすれないようにしたいです。



わたしのお兄ちゃん

わたしは、人権作文を書くにあたって、何について書こうかを考えて、テーマを調べました。たくさんテーマがあったけどその中でしょうがい者というテーマがありました。

わたしには、六つ上のお兄ちゃんと、三つ上のお姉ちゃんがあります。お兄ちゃんは、「注意欠かん・多動性しょうがい（ADHD）」という発達しょうがいがあります。発達しょうがいは、生まれつき脳の働き方にちがいがあるしょうがいのことで、今は薬でしょうじょうを軽くすることができても、完全になおすことは、できないそうです。お兄ちゃんは、小学校6年生のころから毎日薬をのんでから学校に行っています。

お兄ちゃんは、不注意でわすれ物やなくし物がとて

も多いです。小学校のころはわすれ物ばかりしていたそうです。高校生になった今でも、わたしやお姉ちゃんのおかしやアイスクリームを勝手に食べてしまい、注意すると、「次は気をつける」と約束するのに、その約束をわすれてしまうのか、また食べてしまいます。他にも、わたしがゲームをしているとじやましてきて、最後にはゲームをとられてしまいます。こまごたことも多いけど、遊ぼうと言うと遊んでくれるし、宿題をおしえてくれたり、本当はやさしい所もたくさんあります。また、お兄ちゃんの集中力はとてもすごくて、ゲームがとくいです。パズルも得意で、むずかしいパズルもすぐに完成してしまいます。

ADHDという発達しょうがいは、まだあまり多くの人には、知られていません。ADHDいがいにも、

自閉症スペクトラムしょうがい（ASD）、学習しょうがい（LD）なども発達しょうがいです。その人たちみんなが、特別なかんきょうで生活できているわけではありません。お兄ちゃんも見た目がふつうなので気づかれにくくて、こまったことがあっても助けてもらえないこともあるようです。

だからわたしは、一人でも多くの人に、発達しょうがいやADHDのことを知ってもらい、お兄ちゃんや発達しょうがいの人たちがすごしやすい社会になるといいなと思っています。

自分とは少しちがうお兄ちゃんとの生活は、いやなことや大変なこともあるけど、楽しいこともたくさんあります。

わたしは、他の人とはちがった「こせい」をもっているお兄ちゃんが大好きです。家族のみんなもお兄ちゃんの「こせい」をみとめています。

みんなそれぞれいろいろな「こせい」をもっているはずです。これからわたしは、自分をみとめ相手をみとめ、みんなで楽しくすごしていきたいと思っています。



世界に一つのスタンプ

わたしの頭にはスタンプがおされてあります。そのスタンプは、生まれる前に神様からもらった通行手形だと、お母さんが言っていました。

わたしの生まれた病院の先生は、これはしょう来、がんになるかもしれないよくないあざだから、大きな病院で取った方がいいと言ったそうです。一才の時、県外の病院で手術をしたら、あざを取ったあとが新しいスタンプとして大きく残りました。

小さいころからわが家では、きずあとのことを「ハゲちゃん」や「やる気スイッチ」などとよんでいて、楽しく明るいそん在でした。

ようち園に入ったところから、からかわれるのを防ぐために、お母さんがかみの毛の結び方を工夫してくれていました。けれど、わたしはほどいたりしてしまう

事もありました。

きずあとを見た友だちは、

「どうしてかみがないの。」

と、心配してくれる子もいましたが、

「変なの。ハゲてる。」

と、わたしがいやがるのを分かっている何度もからかってくる子もいました。わたしはとてもいやな気分でした。体の特徴がちがうことだからかわれることはとても悲しい事でした。友だちもぎゃくの立場だったらどう思うのかな、言われてうれしいのかな、と思いました。

悲しい体験があったことで、わたしは友だちにどうせっしていけば思いやりをもって仲よくできるかを考えました。

一つ目は、相手がどう思うかを考えて言うことです。わたしがやさしさだと思って言ったことでも、相手をきずつけることがあるかもしれないからです。

二つ目は、ふれてほしくないようなことだと分かっただならば、それ以上ふれないことです。そのことについて答えたくない人もいると思うからです。

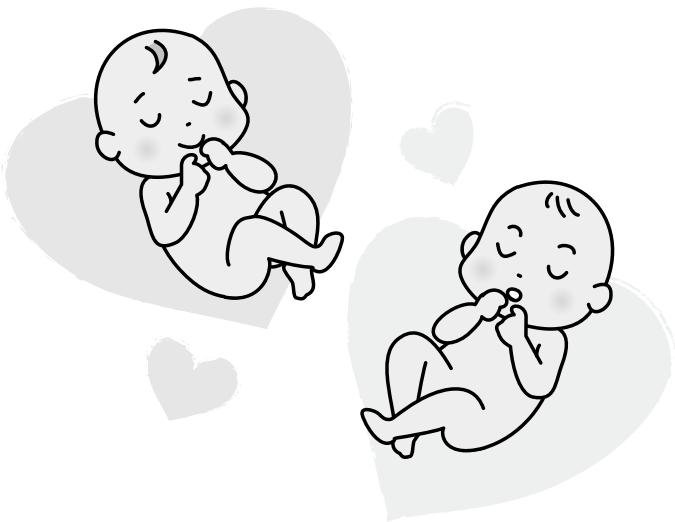
わたしは小さいころから、子ども向けテレビ番組で金子みすゞさんの「わたしと小鳥とすずと」を歌って聞いて覚えてました。詩の中にある「みんなちがってみんないい」という所がとても好きです。なぜかというと、わたしと小鳥とすずは全くちがうけれど、ちがいをみとめ合えているような気がしたからです。

人も同じで、どんな特徴があってもちがいがあってもいい、それがあった方がいい、完ぺきな人などないのです。みんなちがっていいとは、なんてうれしい言葉なんだと思いました。だから、からかわれてもあまり気にしないようになりました。

まわりに思いやりのない言葉で相手を悲しませたりする人がいたら、あなたと同じ人間なんていないと教

えてあげます。悲しんでいる人にも同じように声をかけたいです。

人はみんなそれぞれちがう特徴のスタンプが体のどこかについています。大きなスタンプも小さなスタンプも、形がだれかとちがっていても当たり前なのです。そのスタンプは、その人だけがもっている、この世界に生まれて来るための通行手形だからです。



みんなが過ごしやすい町へ

私は学校の総合的な学習の時間に「私たちの地域が体の不自由な人にとって過ごしやすい町か」ということを調べました。私が毎日登校するときに車とのきよりが近いなと感じたり、点字ブロックがあればいいのにと思ったりしていました。だから一度自分の地区を調べて本当に過ごしやすいかを確かめたいと思いました。

調べた方法としては、グーグルアースを使って道のせまさがどうであるか、また点字ブロックの使い方に ついてもインターネットを使って調べてみました。調べてみて過ごしやすいと思ったことが二つあります。一つ目はグリーンベルトです。グリーンベルトは私たちの校区のいろいろなところに設置されています。学校に行く道やコンビニエンスストアの近くや焼き鳥

屋の近くにもありました。ほとんど学校の近くに設置されていることが分かりました。グリーンベルトがあることで道路と歩道を区別することができると考えられます。

二つ目は、フェンスとガードレールです。小学校の前やパン屋のところ、いろいろなところにガードレールが設置されています。フェンスは学校のすぐとなり マンションのところや中学校の信号のところにあります。ガードレールやフェンスは、車とのきよりを自然にとることができるので安心できます。しかし、フェンスやガードレールがあることで道がせまくなり 車いすの人にとって通りにくくなるようなことがあつてはいけないと思いました。

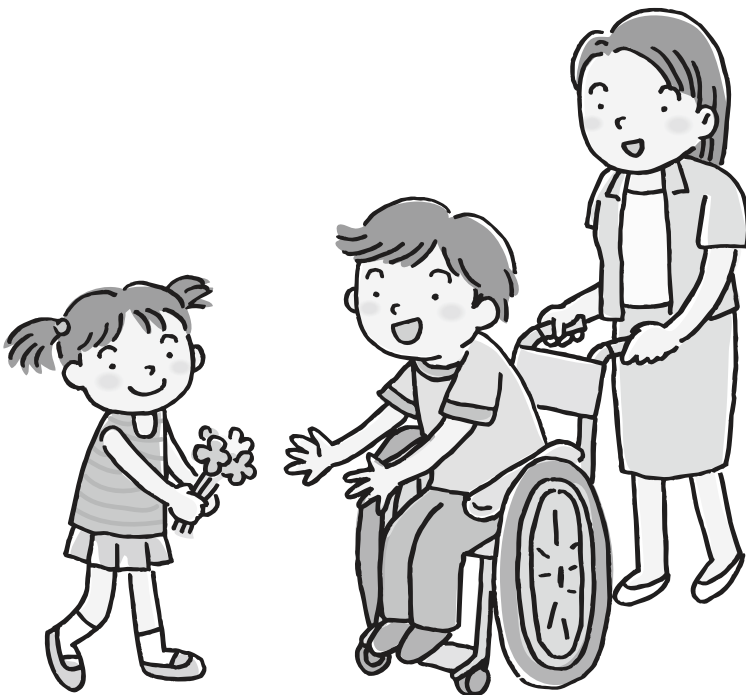
過ごしにくいところは道がせまいことです。私たち

の校区は、いろいろなところに比べて道がとてもせまいです。車が横に二台ならんたら、グリーンベルトに入り込んでしまうくらいせまいのです。これでは、車を運転している人も大変だし、歩いている人も危険です。

次に点字ブロックについて調べました。私たちの校区には、点字ブロックが駅のところしかありません。私たちがいつも通る道には点字ブロックがないのです。信号のところや中学校の前など、あったほうがいいと思うところにもないのです。大分駅や大きなショッピングモールに行くと、点字ブロックがたくさんあるのにおかしいなと思いました。インターネットで調べてみると「点字ブロックは視聴覚障がいの人のかつ快適な移動を支援するための設備として一九六五年に考案された」と書かれてありました。だから、もっといろんな場所に点字ブロックが設置されるべきだと思いました。

調べた結果、道がせまいところにグリーンベルトやガードレールがあるので、安全のために考えられてい

ることが分かりました。でも目が不自由な人が歩く道で点字ブロックが設置されていないことはいけなことだと思いました。体が不自由な人もあたりまえに生活することができるといいます。



ほほえみは共通言語

わたしのお母さんは、時々、耳の聞こえない人を見かけると、ほほえみながら、手話で「こんにちは」とあいさつをしています。話しかけられたその相手は、少しおどろいた様子を見せませんが、すべに、にっこりとした表情になって「こんにちは」と手話で返事をしてくれます。一見、お母さんが手話がすごく上手にできるのかなと感じるかもしれませんが、お母さんは、それほど手話が上手にできるわけではありません。そこでわたしは不思議に思ってお母さんに

「どうして、手話もそんなにできないのに、耳の聞こえない人に話しかけているの。」

と聞いてみました。するとお母さんは、

「少し、イメージしてみてください。もし、あなたが一人で日本語の通じない遠い外国の地において、全く聞いたことのない言語の中で、長年生活するところを。ある日、道を歩いていたら、何年かぶりに日本語で『こんにちは』と話しかけられた

らどう思う？」

と聞かれました。わたしは、

「久しぶりに聞く日本語に、まずびっくりすると思う。そして、うれしいし、ほっとするかな。」

と答えました。私は、お母さんの話を聞いて、耳の聞こえない人たちも、こんな不便さをかかえながら生活しているのかなと、少しですがイメージすることができました。

二〇二〇年三月、新がたコロナウイルス感染症しょうが、世界中で大流行しはじめました。日本政府は、きん急事態せん言を出し、わたしたち家族はとても不安な気持ちの中、コロナによるひ害をテレビで視ちようしていました。そんな中、ふとお母さんの顔を見ると、ふだん、おだやかなお母さんが、めずらしくそのテレビを見ながら、みけんにシワをよせて、何か言いたげな表情をしていました。そこでわたしはお母さんに、「どうしたの。」

と聞いてみると、

「手話通訳士をうつしているワイプが小さすぎるし、そもそも、手話通訳士を置いていないメディアもある。これでは、耳の聞こえない人は、情報が得られないじゃない。」

とお母さんはいきどおりを感じつつ、心配そうにしています。わたしは、字まくがあるからそんなに大きな問題ではないと思いましたが、耳の聞こえない人の中には、字まくや筆談が苦手な人もいることを教えてもらいました。また、新がたコロナウイルスの感せん拡大で、マスクを着用する人が増えたため、口の動きや表情を大切にしており、見る言語である手話にとっては、マスクによってそれが見えなくなると、かなり大変な問題であるということも知りました。たしかに、手話の表現をよく観察してみると、手の動きだけでなく、まゆ毛の上げ下げや、口の動きも活発です。つまり手話とは一つの言語であり、文化も日本語とはまったく別物であることがわかりました。そのような中で、□元が見えらると明マスクを開発しようという動きがすぐにネットニュースになっていたことを覚えています。困っている人のためにすぐに行動し、様々な工夫で助け合えることは、本当にすばらしいことだなと思いました。また、大分県のホームページを見ると、「大分県手話ふきゅうづ

ロジェクト」というものが発足していました。その中で「音が聞こえる人、聞こえない人に関わらず、すべての人が手話を身近に感じ、みりよくあるものと思えるように」や「相ごに人格と個性をそんちようし、歩みよりながら共生する」という文章がのせられていました。自分とはちがう言語や文化を思いやること、相手によりそうことは、すごく大切なことだなと感じました。

世の中には、いろいろな景や文化をもつ人がいます。耳が聞こえる人にも、聞こえない人にも、どんな人にもやさしい社会になることを願っています。そして、世の中のすべての人が、いつまでも笑顔でいられる社会になってほしいです。

そこで、まずわたしは、様々な文化や人けんにゆうれつをつけず、公平に物事を見る目を養いたいと強く思いました。ひとまず、今度はわたしも、自分からほほえんであいさつしたいと思えます。

優しさと理解の輪

私は、脱毛症です。赤ちゃんの時に髪の毛が全部抜けたそうです。お母さんは、

「心配で夜も寝られなかった。」

と、言っていました。病院に通い、髪が生えてきたそうです。治ったと安心していましたが、小学二年生の時に、髪の毛とまつげとまゆ毛が全部抜けました。私は、なんで髪の毛が抜けたのだろうと思いました。今は、髪の毛がない状態です。

髪の毛が抜けてしまって、私よりも、お母さんやおじいちゃんおばあちゃんの方がとても心配していました。そして、お母さんから

「ウィッグを付けて学校に行く？」

と、聞かれました。そして、ウィッグを付けて学校へ行くことになりました。

ウィッグを付けていると、頭が蒸れて熱くなりました。そして、体育のたびに保健室で体操服に着替えていたので大変でした。

学校生活での過ごしにくさをお母さんに伝えると、

「ウィッグをやめてケア帽子で学校に通う？」

と、言われました。私は、

「うん、そうする。」

と、言いました。しばらくしていたことから解放された気分になりました。お母さんは、

「学校の先生に話して、全校のみんなにもケア帽子をかぶることを理解してもらおうと思うけど、いいかな。」

と、言いました。私は、

「ううよ。」

と、言いました。

学年集会の時に、みんなの前で、

「私は髪の毛がありません。これからはケア帽子をかぶって学校で過ごします。笑わないでください。」と、言いました。みんな黙って聞いていました。気持ちが届くか心配でしたが、学校生活は、過ごしやすくなりました。私は、いじめられたり嫌なことを言われたりしたことは、ありません。勇気を出してみんなに話してよかったと思いました。

髪の毛の病気について調べてみると、脱毛症のほかに、自分で髪の毛を抜く抜毛症、チリチリの髪の毛が生えてくるぼう毛症というものがありました。その人たちの多くは、頭を見られるのが嫌だったり、いじめられる心配が大きかったりして、ウィッグをはずせない人たちがいます。知らない病気もありましたが、つらさを想像することができました。私は、先生や友だちの優しさや理解によって過ごしやすい生活を送っています。今は、ヘアロスのことを多くの人に知ってもらいたくて、全国にいるヘアロスの人たちと、ヘアロ

ス啓発活動をしています。そして、優しさや理解の輪が広がる世の中になればいいなと思います。



ひいおばあちゃんの戦争体験から

毎日、安心して暮らせるってこんなに幸せなことなんだと感じる機会があった。これは最近、ロシアとウクライナの戦争についてのニュースを見たり、ひいおばあちゃんの法事の際に母から話を聞いたりしたからである。

今まで人権というと、いじめ問題などのことかなと思っていたが、人が幸せに毎日を生活を送れることこそ人権なのだと感じた。戦争のニュースを見るたびに私が今、楽しく家族や友だちと話をしたり、遊んだりできていることは当たり前のことではないのだと考えるようになった。そして、そのありがたさを感じて過ぎていきたいと思うようになった。このことがきっかけで戦争も人権侵害の要因になるということに気づいた。私たちはみな、幸せに安心して過ごすことが保障されている。しかし、戦争中の子どもたちは学校にも行けず、毎日おびえながら生活している。だから、一日でも早く戦争が終わり安心して過ごせる環境をつくり、彼らの人権を守ってほしいと切実に

願う。そのために、私たちも戦争のこわさや人々の悲しみを知り、共感し、戦争が起きない、みんなの人権が侵害されない世界をつくってほしいという強い意志を一人ひとりがもたなければならぬと思う。

また、母からひいおばあちゃんのことについての話を聞いた。ひいおばあちゃんが亡くなった際に、ひいおばあちゃんが大切にしていた木の箱を見せてもらった。色々なものが入っていたが、あるものを見つけ、びっくりした。それは、ばくだんのかげらだ。このかけらは、おじいちゃんが2才のころ、家でねていた時に空から降ってきたものだ。突然、上空にアメリカの飛行機がきて、しょうい弾が家の中に飛んできたそうだった。幸いにも部屋のかげじく当たり、おじいちゃんに当たらなかったそうだが、もし、かけじくがなければおじいちゃんに当たったり、命をうばわれていたかもしれない。命のありがたさを実感するためにひいおばあちゃんはこのばくだんのかげらを大事に取っ

ていたと母から教えてもらった。もし、おじいちゃんにしょうい弾が当たっていたら、母も私も生まれていなかったかもしれない。そう思うと、命の尊さを実感し、安心して暮らせていることはとてもありがたいことなんだと改めて感じた。箱の中にはひいおじいちゃんの日記も入っていた。戦争中、ひいおじいちゃんは海軍で活躍し、大変な経験をしながらもなんとか帰って来れたようだ。しかし、油の浮いた海を泳ぐなど、戦争中にいろいろな無理をしたことが原因で肺結核となり、亡くなったそうだ。その日記にひいおじいちゃんは「こんな病気になり無念だ」と書いていた。もし戦争がなければ、ひいおじいちゃんももっと長生きができて自分のやりたいことを十分にでき、悔いのない人生を送れたのではないかと思った。やはり、戦争は人々の人生、権利をうばっていくものだと感じた。

私はニュースやひいおばあちゃんたちの話を聞き、このことをみんなに伝えていきたいと思うようになった。今ある幸せは当たり前のものではないということ、そしてこの幸せをみんなの思いによって当たり前にしていかなければならないということとを私は多くの人に伝えたい。このことは私一人の力では難しい。しかし、今自分にできることをしていきこうと思う。そこで、自分ができるとは何かを考えた。

一つ目は、学習することだ。この経験を通して人権とはいじめのことだけではないことを学んだ。この他にも人権がおかされていくことはないか様々なところにアンテナをはり、知っていくことが大切ではないかと考える。自分の身の周りや世界には他のことでも苦しんでいる人がきつっていると思う。そのことに気づき、その人たちの気持ちに寄りそっていきたい。今後は学校やニュースなど、色々な場面で学んでいきたい。

二つ目は、自分の命や自分自身のことを大切にして感謝の気持ちをもつことだ。おじいちゃんが助かった話を聞き、自分が生まれたことはきせきなのだと思うようになった。自分を大切にすることで自分も相手のことも大切にしようとする心が芽生えてくると思う。

三つ目は、自分の考えをきちんと伝えることだ。一人ひとり考え方は異なる。上手に伝えられなかったり、言い合いになったりしてしまうと相手とは分かり合えない。相手と違うからこそ、けんかをするのではなく、きちんと伝え合い、考えを認め合う。これができれば世界から戦争がなくなると思う。自分にできる一歩が世界を変えられるかもしれない。まずは授業中、自分の考えをみんなに伝えたり、友だちと活動する時に話し合ったりし、伝える練習をしていきたい。

悪ふざけ

ぼくは、小学校生活のあいだに、様々な経験をしてきた。

ある日の学校帰り、友だちと楽しく話しながら帰っていたら、一しよのクラスの子が三人、後ろからやってきた。その三人は、ぼくたちに追いつくと、とつ然、追いかけて回してきた。なぜ追いかけてるのか分からず、追いかけるから、ただひたすら一生けん命走ってにげた。家の前まで追いかけられ、あわてて家の中にかげこんだ。顔は真っ赤になり、汗びっしょりで激しい息づかいをするぼくを見たお母さんが心配そうに、「どうしたの？何があったの？」

と、聞いた。そう聞くお母さんに、

「何がなんだかぼくにも分からない。友だちと楽しく話しながら帰っていただけなのに、とつ然、後ろから来たクラスの子たちに追いかけられたんだ。」

と、答えた。でも、そう聞いたお母さんは状きょうを理解出来ない様子で、

「そんな事ってあるの？一しよに帰っていたんじゃないの？それに今、足をケガしているのに走ったの？」

と、質問が続いた。そうだった！ぼくは今、足をケガしていたんだ。にげるのに必死で忘れていた。ぼくだって何が起きているのか分からない。自分の心の中も色々な感情でグチャグチャで気持ちの整理もつかず、

「ちがうよ。一しよに帰っていた訳じゃない。」

と言つのがせいっぱいだった。ぼくの困った様子に気付いていたお母さんが、

「明日、学校で話し合ってみたらいいんじゃない？話してみないと、相手に自分の気持ちは伝わらないんだよ。」

と、言った。ぼくは「分かった」と答えたけど、心の中では正直めんどくさいなと思っていた。なぜなら、ぼくは自分の気持ちをつまく相手に伝える事が苦手だからだ。だから今までも、どんなにいやな事をされても、自分がだまってガマンをしてい

れば、その場が過ぎ去るまでじっとたえていれば良いと思って
いたし、そうしてきた。お母さんはぼくの事をよく分かっ
ている。だから話し合いの提案をしたんだろう。

ぼくは気が乗らなかったが、次の日、一しょに帰っていた友
だちにも声をかけ、三人と話し合ってみることにした。ぼくは
勇気を出して聞いてみた。

「ぼくたちは楽しく帰っていただけなのに、何でとつ然追いか
けてきたの？一しょに帰ってなかったよね？それにぼくは
今、足をケガしてるの知ってた？」

三人は、しばらくだまったままだった。ようやく一人の子が、
「悪ふざけしただけ。足のケガの事は知らなかった。」

と、答えた。それを聞いたぼくは、心の中ではすぐく腹がたっ
ていたけど、

「すぐくいやだったし、足がとでもいたかった。もう二度とあ
んな事はしなぐで。」

としか言う事が出来なかった。三人は、ぼくと友だちにあや
まったけど、ぼくの心は晴れなかった。また、次があるだろう
と思っていたからだ。一人の子はいつも、ぼくにいやな事を
言ってきたり、してきたりしていた。そのたびに「悪ふざけし
ただけ」と言っただけ。相手にとっては、ちょっといかけて悪ふ

ざけで楽しんでいるのかもしれないけど、やられているぼくの
気持ちは最悪だった。どうすればこの気持ちが伝わるのかと考
えてみました。考えても考えても、解決につながる答えは見つ
からなかったが、気付いたことがあった。それは、いじめが起
こる原因も同じなんじゃないかという事だ。やっている方は、
されている方の気持ちを知らず、やってしまうのだと思う。だ
けど、知らないからといって何をやってもいいわけじゃない。
自分が言われていやなこと、されていやなことは相手もいやだ
ということを知ってほしい。

人権学習や平和学習、道徳の学習はあるけれど、いじめが減
らないのは、先生や親の前ではいい人のふりをするけど、かけ
でいじわるを言ったり、したりするから、なかなか気づいては
もらえないのだと思う。

今、いじめをしている人は、「悪ふざけ」の一言ですまして
ほしくない。

ぼくは、なんとかのりこえてきたけど、今いじめられている
人は、家族や先生などの信頼できる大人に相談してほしい。

この世の中からいじめが無くなることをぼくは願っている。

あの時の僕

僕はお話があんまり得意ではありません。だから僕が言ったことをすくなく理解をしてももらえない時があります。例えば、「作文」と言っているのに「えっ、何？」と言われ、何度も同じ言葉をくり返し相手に伝えることがあります。そんな時、とても悲しくなります。だけど、自分の言葉や気持ちをわかっただけでいいので工夫しています。「作文」を「さ・く・ぶ・ん」とひとつずつ区切って話したりします。それでもわかっただけでいい場合、あきらめてしまうこともあります。それが嫌で、最初から話さないで周りの皆の話を聞いているだけで終わることもあります。そんな僕はバカにされ、とてもつらい時期がありました。

小学六年生の時のことです。僕が話した言葉を大きな声でかかってきたのが始まりです。何度も「違っ、そんなことを言っていない」と言っても、さらに「違っ」と言った言葉さえもかかってきました。はじめは一人だったのが、日が経つにつれ

て言ってくる人が増えてきました。そのことを面白がって毎日言ってくる人もいました。先生に相談してもわかっただけでいいませんでした。また、今起きていることを両親に伝えることができませんでした。なぜなら、両親に悲しい思いをさせたくはなかったからです。それに僕は、小さい時から話が上手に出来るように、言葉の教室や支援クラスで皆に支えてもらっていたから伝えにくかったのもあります。そんな毎日を送っていたある時、母が僕の様子がおかしいことに気付いてくれました。今まで言えなかったことを少しずつ両親に聞いてもらいました。つらい日々でもがんばって登校をしました。けれど登校出来なくなりました。先生と両親で話し合って、数日は午前中だけ別の教室に通うことになりました。そこでは、クラス以外の友だちがいて、落ち着いて過ごすことができました。いろんな先生が来てくれて充実した時間を過ごすうちに、だんだんと心に栄養が注がれて、少しずつ元のクラスに行くことができるようにな

りました。

そろそろクラスに戻れそうだなと思っていた時です。友だちのお父さんが僕をからかっていた人を怒ってくることがありました。家の玄関にクラスの人が来たのには、とても驚きました。そして「毎日嫌なことを言っておめんなさい」と言ってくれました。本当に心から安心しました。だけど次の日はやはり心配で、ドキドキしながら登校しました。

ドキドキしていたけど、一つだけ心に決めていたことがありました。それは、あやまってくれた友だちに「おはよう」と言うことです。そして緊張しながらも「おはよう」と言えました。その友だちも僕と同時ぐらいに「おはよう」と言ってくれました。言葉に表わせないぐらい嬉しかったです。その日からその友だちと、毎日ハイタッチして仲を深めていきました。言葉の苦手な僕には、言葉以上の「ハイタッチ」でした。

僕が本当につらい時に助けてくれた友だちもいました。「大丈夫？」「元気だして」「つらかったら休んでもいいんだよ。僕もそんな時もあるよ」とやさしく声をかけてくれました。ふーっと肩の力が抜けていく感じがしました。その友だちが困っているときには僕なりに言葉かけをしました。助けてもらったことを思いだして話しました。こうやって困っている友

だちを助けることが出来るのは本当に嬉しいです。

僕にとって、言葉でのコミュニケーションはやはり苦手なところがあります。だけど僕を助けてくれたのは「言葉」でした。だからこれからも、ゆっくりでも分かってもらえるようにしたいと思います。話が苦手な僕だけど、今はそんな僕を全部を受け止めています。言葉をこえたコミュニケーション「ハイタッチ」のように、誰とでも言語が違う人達とも分かりあえるようになったらいいと思います。

「あの時の僕」に今の僕が伝えることができるなら、「大丈夫。心配しないでいいよ。今苦しいけど、勇気をもって歩き出してしっかり自分の足で歩いているよ。楽しいと思える時間ばかりだよ」と伝えたいです。

そして皆に分かってもらえる言葉を話せるように、自分できることをしていきます。「言葉の暴力」という言葉があります。僕も自分が話した言葉で相手を傷付けることがないように気をつけます。言葉の暴力は心が痛く悲しくなります。僕も言葉でつらい思いをしたからわかります。だから自分の言葉に責任をもった言動をします。そしてまちがった言葉を使ってしまったら素直にあやまります。言葉は人と人をつなぐ大切なものです。大切に使っていきます。

障がいのかべをこわす

私は差別をしない。そう決めています。

その理由は私のおばさんにあります。

私のおばさんは生まれながらに障がいがあり、差別されながら生活しています。

おばさんの障がいはダウン症（ダウン症候群）と言って、見た目や発達のスピードに特徴があります。その中でもおばさんの症状は酷くて、心臓も悪く、小さいときに手術をしています。そして、言葉は出るけど話せません。正直、私はおばさんの言っていることが理解できたことはありません。でもその代わりに、おばさんは絵で感情を表現しています。昔から絵を描くのが好きで、それは続いています。そして、今では大分県立美術館（OPAM）で絵が飾られたり、個展を開いたりもしています。私は、障がいがあっても活躍しているところがすごいと思いました。

そもそも、障がい者差別とはどういうものなのかよく分かっ

ていなかったので調べてみました。障がい者差別とは、身体的、あるいは精神障がいのために受ける差別のことで、人権や生存権が損なわれるような経験を障がい者本人の意思とは無関係に強いられることで、具体的には暴力、暴言、名誉毀損、障がいを理由とする社会参加の制限や排除などがあるそうです。

私のおばさんも、昔住んでいた地域の新入生全員がもらえるはずの小学校の入学通知書がなかったそうです。理由を学校に聞きに行くと「おばさんの指導をできる人がいないから、入学させることができない」と言われたそうです。そして、中学校入学のときにも入学通知書はなかったそうです。私はその話を聞いたとき、人が人として見られてないような気がして悲しくなりました。

最近、おばさんと出かける機会がありました。今まで気づかなかったけど、歩いているだけで何人もの人にジロジロ見られていて悲しくなりました。以前は指をさされたりすることも

あつたそうです。他にも段差が辛そうだったり、走れなかったり、意識してみると今まで見えなかったことがたくさん見えてきました。そのことを母に聞いてみると、おばさんは三十代だけど体の状態は老人と同じぐらいだそうです。

私は周りを見ている方だと思っていました。でも自分以外の周りは見えていなくて、困っている人に気がつきませんでした。そのことに気づけた今は、困っている人に気づける人になりたいと思いました。

今回、障がい者差別について調べたりおばさんの話を聞いたりしたこと、今まで気づけなかったこと、見えていなかったことがいくつも見えてきました。障がいがあっても、スポーツでパラリンピックに出て、活躍したり、アイドル活動をしたりしている人もいます。そして、障がいがある人が活躍している姿を見て、私も今からでも何にでもなれて、自分の好きなように、自分らしく生きられると勇気がわきました。私は今まで、やりたいことがたくさんあつたけど、周りには私よりその分野が得意な人が多くて、諦めてしまうことがたくさんありました。でも今は、周りより劣っていても、好きなことや、やりたいことにチャレンジしていいこうと思います。例えば、デジタルでイラストを描いたりするのは、設定や使い方が難しく、今

まであまり描いてこなかったけど、今後はデジタルで描く練習をしようと思います。他にも、歌いたい曲やピアノで弾きたい曲があつても、上手くできないから諦めていたけど、チャレンジしていいこうと思います。

私は、障がいをハンディキャップだと思っていたところがあつたけど、私がメガネをかけているように、足が速い人、歌が上手い人がいるのと何一つ変わりなくて、個性みたいなものだと思うようになりました。

私は今まで親戚のことを聞かれても、おばさんの話をしたことがありませんでした。それは、おばさんとの間に知らず知らずのうちにかべをつくっていたからだと思います。かべがあることに気づけた今からは、そのかべをこわして、障がいについての関心を深めていいこうと思います。

つらい経験から学べたこと

私は、まさか自分がいじめられるとは思っていませんでした。これは、私が実際に経験したことです。小学五年生のころ、とても仲が良かった〇〇ちゃんが、「おはよう」と言っても、返事をしてくれなくなりました。初めは聞こえなかったけど、だんだん私は無視をされていることに気が始めました。そして、無視をされる日々は何日も続きました。

このまま一人で悩み続けるのはだめだと思い、友だちに最近〇〇ちゃんに無視をされるようになったことを相談してみました。初め友だちは、

「聞こえなかっただけじゃない。私はいつも通りだよ。」と、あまり信じてくれませんでした。ところが数日後に友だちも〇〇ちゃんから無視をされるようになったと同じ悩みをかかえるようになりました。日に日にいじめはエスカレートしていき、「おはよう」とあいさつしてもふりむいてくれなくなり、私の言葉を聞いていなかったかのように通り過ぎていきま

した。しかも、幼稚園からずっと仲が良かった友だち二人からもだんだん無視をされるようになりました。私のことを見ながら、三人でこそこそ話すようになり、そんなつらい日々が約二カ月間続きました。

私はいじめのことを親にも先生にも言うことができずにとだまっていました。私の心の中はいやな気持ちで暗く、「いじめられるのはこんなにつらいんだ」という思いでいっぱいでした。親や先生に言って助けてほしいという気持ちもありましたが、いつも一緒にいるくらい仲の良かった〇〇ちゃんにいじめられていると言ってもあまり信じてくれないと思い、とだまっていました。

そんな毎日が続き、三カ月が経ったころ、私は限界をむかえました。まず、母に相談してみることにしました。母はしんけんに最後までうなずきながら聞いてくれました。母は聞き終わった後、

「そっか。最近学校でそんなことがあってたんだね。気づけな

くでごめんね。もう大丈夫だよ。」

と、やさしく声をかけてくれました。そのとたん、私の心の中にあつたいやな気持ちが少し軽くなり、目からたくさん涙がこぼれ落ちました。私は何より信じてくれたことが一番うれしかったです。すぐに母は学校に電話し、先生も疑うことなく、事実を受けとめてくれました。学校でも先生が私たちの様子を見てくれるようになりました。母と先生は毎日、その日のことについて話していました。先生は私を何日かに一度呼び出し、行動の変化や今の気持ちについて聞いてくれるようになりました。

私の思いを聞いてくれた先生は、関係している人をみんな集めて話し合いを行いました。私が本人の前で今の気持ちを伝えることができなかったのも、毎日がとても悲しかったこと、学校に行きたくなかったことを、代わりに先生が伝えてくれました。○○ちゃんは黙って最後まで聞いていました。そのあと、私のところへ来て、

「今までごめん。無視してごめん。いやな気持ちも知らずにやっつてごめん。」

と、謝ってくれました。私は勇気を出して、

「いいよ。でも、なんで急に無視をするようになったの。私、

何かいやなことした。」

と、聞いてみました。そうすると○○ちゃんは、

「してないよ。ただしゃべらないゲームをしてただ。」

と、正直に告白しました。私は、「なぜこんな遊びをするのか」といかりがこみ上げてきました。でも、正直に話してくれたので、つらい気持ちは消えていますでしたが、許そうと思いました。

それから、学年が上がって、私たちは前みたいに一緒にいることが増え、たくさん話すようになり、関係を戻すことができました。

私は今、いじめられている人を見ると、「最近いやなことされてない？大丈夫？」と声をかけられるようになりました。前の私は、声をかけることなど絶対にできなかったと思います。ほんのささいなことでもされた本人がいやだな、つらいな、やめてほしいな、と感じることは全ていじめだと思っています。

今も、これからは絶対に忘れないあの時のいじめ。あの時はつらい毎日でしたが、今思えば、その経験をしたことでいじめについてしんげんに考えることができるようになったと思います。

いじめは決してあってはいけません、いつ誰が標的になるかわかりません。いじめられるつらさは痛いほどわかるので日ごろから見ぬふりをせず、悩んでいる人や困っている人に寄りそい、助けてあげられる人になりたいと思っています。

私の吃音とみんな

私には幼いころから、「吃音」という障がいがある。吃音とは、話す時に最初の一言に詰まってしまうなど、言葉が滑らかに出てこない発語障がいの一つだ。二歳から四歳の間には人口の約五パーセント、つまり二十人に一人が発症するといわれている。私の場合は、いつ発症したのかわからない。けれど、人の前に立ったり、たくさんの人から注目をあびるとき、私は言葉がうまくでない。日常的に言葉がでないときはあるので、緊張すると、ひどくなるといったほうがいい。保育園にかよっていたころの私は、この吃音について、とくに深く考えたことはなかった。

自分がみんなとは違うことに気づいたのは、小学校に入ってからだ。授業中、クラスみんなはスラスラと物を言っているのに、私はうまくできない。国語の授業は特に嫌いだ。みんなの前で文章を読むとき、うまくしゃべれなかった。でも、私はクラスメイトから、同級生から、この吃音のことだからか

われたり、バカにされたことは一度もなかった。一度もだ。だからこそ、あの瞬間のことを今でもしっかりとおぼえている。

私が小学校四年生のころの話だ。私の学校には他の学年との親交を深めるために、月に一回程度、各学年から五人ずつくらい集まって、三十人の班をつくり遊ぶ日があった。私はその日、遊びの中で、一人でしゃべる時があった。緊張しながら一生懸命に話す私の目に飛び込んできたのは、私のことを見て薄ら笑いを浮かべる上級生の顔だった。とても悲しかった。きつとも思っていないかったのだと思う。ただ、うまくしゃべれずにいる私が、滑稽に見えたのだろう。ただ笑うだけ。これだけのことが私を深く傷つけた。

今では、人の前に立ち、しゃべるときは、話し方を工夫し、言葉ができるように努力している。でもときおり、自分はうまくできているだろうかと不安になるときがある。そんなときよく思い出すのが、昔読んだ一冊の絵本の言葉だ。「ジャガーとの

やくそく」という本は、吃音がある主人公が、弱い自分に負けずに子どもたちの動物園のジャガーとかわした約束をかなえるという話だ。この絵本の最後に作者が、「吃音という才能を与えられたのは幸運なことだ」と語っている。障がい不幸と思わず、幸運なことだという考えに、私はすごくおどろいたのを覚えている。そんな考えが私にはなかったからだ。

人は誰でも、自分自身にコンプレックスの一つは持っているだろう。走るのが遅かったり、みんなよりも身長が低かったり、それこそ、人の数だけあると思う。でもそれを嫌いにならないでほしいと思う。走るのが遅い自分も、身長が低い自分でも、それも全部ひっくるめて自分という存在ができてきているのだから。また、相手と自分の違いに気づくことも大切なことだと考える。誰かとの違いを認識し、認めることができれば、誰かを見下すこともバカにすることもなくなると思う。

吃音という障がいがある私は、たぶん他とは違っているのだと思う。それでも、私が孤立しなかったのは、偏に私の周りの人たちが、その違いを認め、あゆみよってくれたからだと思う。それなら、私は、私自身のコンプレックスといえる、「吃音」を好きにならなければと思う。「ジャガーとのやくそく」の作者のように吃音があることを、幸福だと思わなければ。私は吃

音があることをうれしいと思ったことは、一度もなかった。吃音がなければ、やれたことがあったかもと考えることもある。でも、今の私が全てなのだと思えるようになりたい。自分の嫌いなところまで、大好きになりたい。今はそう思えなくても、いつかきつと、自分の全てを認められるようになりたい。そうすれば、今よりも、もっとたくさんのごことがうまくいく気がする。

障がいがあったりなかったり。得意なことがあったりなかったり。人それぞれあるけれど、自分と相手の違いに気づき、認めあうこと。自分の嫌いなところや、コンプレックスを、それも自分の一部として、うけいれること。この二つだけで、今よりももっとたくさんのごことがわかり、それぞれがお互いに尊重しあえると思う。

差別をなくすために

残念ながら世の中には男女差別や人種差別などの差別がある。今よりもいい社会をつくるには、こういった差別をなくす必要がある。

以前、大学が女性だけ合格者数を減らしていた、というニュースがあった。そのときの僕は、そんなことがあるんだ、としか思わなかった。しかし、今になって考えてみると、それは差別じゃないか、どうしてそんなことするんだろうと、許せない気持ちでいっぱいになる。日本では、「男尊女卑」という考えがあるが、その考えがなくならずに今も続いていると思うと、とても残念な気持ちになる。よく周りを見ると、「それおかしいでしょ!？」と思う根拠のない差別的な扱いがたくさんあることに気がついた。同時に、それをなくすためにはどんなことができるだろうと考えた。

一番大事なのは「差別について関心をもつ」ということだと考えた。差別について関心をもつと、どうしてそのようなこと

になったのか、今はどんな状況か等、差別について知ろうとする。差別について理解すると、差別される人はどんな気持ちで生きているのか、自分は知らないうちに差別をしてないかなどを考えるようになる。だから、差別についてまず関心をもつことが大切だ。

僕はネットでLGBTQなどの性的少数者についての記事を読んだ。僕は小学校の低学年の頃、男の子の友だちがあまりいなくて、女の子と遊ぶことが多かった。それを見た周りの男の子から「男のくせに女子とばかり遊んでる」「や」「男子のくせに外に出て遊んでない」などと言われたことを覚えている。その時は、幼いながら「なぜダメなのか?」と思い、イライラした日々を送った。でも高学年になるにつれて、このように言われることは少なくなった。今考えると、周りの友だちの多くは「男は男と遊ぶもの」「男は外に出て元気に遊ぶもの」という考え方をもっていたのだと思う。でも、僕は女の子と遊ぶこ

とをやめなかったので、少しずつ彼らにとって男の子が女の子と遊ぶことは普通の光景になっていったんだと思う。そんな僕でも、中学生になって、他の小学校出身の人たちは男女が普通に仲が良かったのには、びっくりした。

このことから、差別は「こうあるべき」という思いこみやへん見から生まれることが多いのではないかと考えた。僕にとって女の子と遊ぶのは「普通」のことだったから、周りの友だちからいろいろと言われるのは悔しかったし、「なぜ？」で頭がいっぱいだった。「普通」の基準は人それぞれだと思う。だから、自分の「普通」の基準を他の人にあてはめてみるのは違うと思った。

今、LGBTQなどの性的少数者のことがよく話題に上がる。僕の学校も来年から制服が変わり、女子がズボン、男子がスカートを選んでもよくなる。きっと、これまでの「普通」に当てはめられ、苦しんでいた人たちにとって少しは楽な気持ちになるのではないかと思う。

今すぐに男女差別などの差別を全てなくすことは難しいかもしれない。何百年も前から続く人間の考え方はそう簡単には変わらないだろう。しかし、変えようとしなければ変わらないのも事実である。今、世の中は校則や性の多様性など、急速に考

え方が変わってきている。僕自身、無意識のうちにも、「僕の普通」を他の人にあてはめて考えていることがあるかもしれない。そんな時は相手を否定するのではなく、その人自身をしっかり見て、物事を判断できる大人になっていきたいと思う。



障がい者差別について考える

みなさんが今生きている世の中は、生活しやすい世の中だといえますか。私にとっては優しい家族や友だち、学習できる環境、大人からのサポートのおかげで生活しやすいと感じています。しかし、誰にとっても生活しやすい世の中とは言えないと思います。

そう思ったきっかけは、同級生の発言や、弟の存在にあります。

小学生の時に、友だちと校庭で遊んでいた時のことです。私は「お調子者」といわれる性格で、その日も変顔をしたり、力二歩きをしたりと、ふざけながら遊んでいました。すると、知らない下級生の男子が三名ほどこちらにやって来ました。彼らに話しかけられたこともあり、私は彼らと遊んでいました。しばらく一緒に遊んでいたうちに、彼らは私に突然こんなことを言ってきました。

「お前ぞ、〇〇通ってるの?」

〇〇とは、小学校の特別支援学級のことでした。私は、そこに障がいのある仲間が通うことは分かっていました。その時は、苛立ちよりも驚きが出てきました。彼らは障がいがある人をおかしな挙動をする人とは思っていないのだと。私には、軽度の発達障がいのある弟がいるため、障がいとはどのようなものかということを知っていました。それもあり、彼らの発言で、私はとても心が苦しくなりました。

中学生の時に、体育の時間、ある女子生徒を見て、違う小学校出身の友だちが私にこう言いました。

「見てアイツ。何回も同じミスしてる。馬鹿みたい。」

私は同じミスをする彼女の真剣な表情からはそんなことは言えませんでした。

「え、頑張ってるやん。すごいよ?」
と友だちに返すと、

「アイツ小学生のころみんなに嫌われてたんだよ? Aちゃんっ

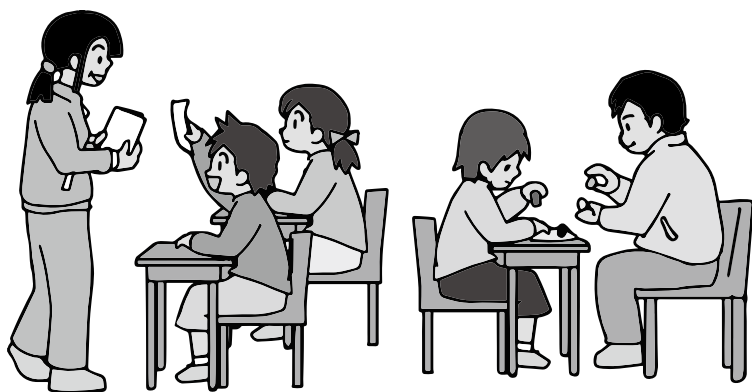
「優しいんだね。」

と、言われました。私は彼女の頑張りに感心しただけであつて、優しくしたつもりはありません。普通のことと思つて言っただけでした。そして後日、私が廊下を歩いている時、彼女が特別支援学級に向かっているのを見て、複雑な気持ちになりました。

このようなことから、誰もが生活しやすい世の中とは言えず、もっと世間の障がいに対する理解を深めるべきだと思ひました。なぜなら、障がいのある人のことを悪く言う人は、障がいに対して無知だと思つからです。私も弟がいなかったら無知だったと思います。障がいのある人の過度なこだわりや、特性上苦手できないことがあるところを、人はおかしいと思つているのだと思います。私の弟は小さい頃に療育に通つていました。療育とは、障がいのある子どもの困り事の解決、将来の自立を目指した支援や訓練のことです。私は療育施設についていった時、たくさん子どもがいて、担当のスタッフが、その子たちの親に訓練の様子やその日できたこと、できなかったことを話している様子を見ました。みんな頑張っているなと感心します。私はその様子を知っているため、障がいのある仲間の悪口を聞くと、彼らや彼女らの苦手克服のための努力を見てほ

しいという悔しい気持ちになります。

自分の知らなかったことを知ると人の輪が広がり、みんなが温かい気持ちで人と接することができるようになると思つています。人は誰でも平等です。自分と他人との違いを認めることから始め、老若男女や障がいの有無など関係のない人と人の間に壁のない世の中に、私たちが生きていきたいと思ひます。



想像することの大切さ

僕の母はとても声が大きい。怒られるときなどはとてもうるさく、すべに言い返してしまう。母は職場でも、「どこにいるか声ですぐ分かるわ」と言われるらしい。

と、言われるらしい。

そして、僕の母方の祖父は難聴のため声が聞こえにくい。生まれた時は正常に聞こえていたらしいが、小さい頃に高熱が続き、聞こえにくくなっていったそうだ。祖父と話をしたときに耳の話になり、小学生の頃の授業は先生の声が聞こえにくかったこと、特に、音楽の授業が嫌だったことを聞いた。耳が聞こえにくいと音程が分からず、歌を歌うことがとても苦手で、歌のテストの日は何度も休みたいと思ったそうだ。こっそり祖母が、

「小さい頃に病院でしっかりと検査をしていれば聞こえるようになっていたかもしれないんだよ。声が聞こえにくいから人の話を聞いていないと思われたり、無視していると勘違いさ

れたりしたみたいで、じいじかわいそうだよね。」と、耳打ちしてくれた。

僕の祖父は、絵が天才的に上手くて本格的な絵をたくさん描いたり、ジムに行って体を鍛えたり、ご飯を二杯食べながらお酒を飲んだりする、元気な人だ。僕が小さい頃、公園に一緒に行った時は全力で遊んでくれた記憶がある。いつもにこにこしていて、僕や弟と話すことが大好きで、家に行った時は話が終らない。

ただ、ふと考えてみると、祖父に話しかけた時にはいつも「うん？」と聞き返される。小さい頃は分からなかったが、あの時母が、

「じいじは耳があんまり聞こえないんだよ。じいじにお話をする時は、正面から目を見て大きな声で話してね。」と教えてくれた。そして、

「お母さんは、小さい時からじいじと話す時はいつも大きな声

で話していたから、未だに人と話す時に声が大きくなってしまっただよね。」

と、笑った。なるほど、それで母は普段から声大きいのか…と納得した。

祖父は何年か前に補聴器を買ってみたが、長年使わずに生活していた為、雑音がかなり入って頭が痛くなるので、日常生活ではあまり使っていないらしい。ただ、家ではテレビの音が聞こえるように、スピーカーをダイニングに置いて、近くで音を聞いている。

僕が、祖父のいつも元気でにっこしている以外の大変な面を知ったのは、かなり大きくなってからのことだ。それまでは何も気付かず一緒に過ごしていたが、本当は見えない所にもたくさん困りがあったのだろう。

相手の困りに気付き、声をかけるなど行動する事も大切だが、まだ見えていない、気付いていない困りがあるかもしれないと想像して思いやることも今の世の中、本当に必要だと思う。

例えば、コンビニのレジでお金を出すのに手まどっている人は、後ろの人からしたら急いでほしいだろうが、少し想像して…もしかしたら小さな赤ちゃんを抱っこしているかもしれないし、目が見えない人もかもしれない。自転車で走っている時

に、ベルを何回鳴らしても避けてくれない人にイライラしてしまっただろうが、少し想像して…もしかしたら耳の聞こえない人もかもしれないし、手術をしたばかり、退院したばかりで思うように動けない人もかもしれない。

何事も自分のものさしだけ、経験だけで考えてはいけない。常に、「もしかしたらこの人はこういう困りがあるのかもしれない」と、想像できる心と考えをもてるような人になりたい。



特別視しないということ

私のお母さんの実家のある別府市は障がい者施設がたくさんある。そのため町では車イスに乗った人をよく見かける。

ある日、お母さんと一緒に買い物に行くと、入り口で車イスに乗った人が中に入れずに困っていた。私が（どうしたのかな、誰か手伝わないのかな）と思いついてみると、お母さんがその人の側に行き、

「どうしましたか、何か手伝うことはありませんか。」

と、声をかけた。するとその人はびくびくしたように顔を上げ、「いいですか。お願いします。」

と、言った。その人はお中元の品を買いに来たが、入り口に人がたくさん居て入れなかったこと、手足が不自由でお金を財布から取り出せなくて困っていたことを話してくれた。その話を聞いたお母さんは、お会計までその人に付きサポートしていた。店を出てからお母さんに、

「すいいなあ。よく声を掛けられるなあ。」

と、

「そうかな。困っている人がいたら声を掛けるのが普通でしょ。」

と、あっけらかんと答えた。私はその瞬間、今まで車イスに乗っている人を「特別な人」「自分とは違う人」という目で見ていることに気がついた。そして困っている人に対して何もできずに（誰か手伝ってあげたらいいのに）と他人事のように思っていた自分を恥ずかしいと思った。振り返ってみればお母さんはいつも人のためを思って行動している。

今夏、お母さんの働いている子ども園で新型コロナウイルス感染者が急増した。毎日のように感染者の報告があり、お母さんもいつ感染するか分からない状況になった。私はお母さんに近づいたら、自分まで感染してしまうのではないかと怖くなり、お母さんのことを避けてしまっていた。仕事に行かせるのも怖いと感じてしまった。それをお母さんに伝えると、とても

悲しそうな顔をして、

「感染した人だっとなろうと思って感染したわけじゃない、感染対策をきちんとしているのになる人だっているんだよ。そんな風に新型コロナウイルスに対して特別な感情をもってはいけないよ。」

と、言われた。お母さんの働いている子ども園では、元気に出勤している保育教諭たちが、子どもたちの使ったおもちゃや机、イスなどの消毒を毎日行っているそう。そういった対策をすることで、保護者の方も安心して子どもたちを任せられると思う。しかし、それには感染するリスクを伴いながら働いてくれている保育教諭たちがいることを忘れてはいけない。保育教諭だけではない。どの仕事だってそうだ。対面だと感染するリスクはあるが、みんな頑張っていて働いてくれる。私が今、普通に暮らしているのは、そういったリスクを伴いながらも働いてくれているたくさんのおかげだ。だからこれからは、その人たちを避けるような行動はしないこと。また、感染してしまった人たちへの嫌悪感をもつのはやめようと心に誓った。

今日もお母さんは元気に仕事に向かう。私はその後ろ姿を見てとても誇らしいと思う。私もお母さんのように誰に対しても分け隔てなく接することができる、強く優しい人になりたい。



トランスジェンダーと差別について

「トランスジェンダー」。私はこの言葉を最近知りました。トランスジェンダーとは、こころとからだの性が一致していない人のこと、生まれた時は男性で自分のことを女性と認識している、または逆の場合があるものを言うのだそうです。私は女の子に生まれ、女の子としての生活が当たり前だったので、自分が女の子であることを疑問に思ったことはありません。だから最初は、トランスジェンダーという言葉がよく分かりませんでした。

私なぜこのトランスジェンダーに関心をもったかと言うと、私の母にトランスジェンダーの友だちがいるからです。その人と母は中学生の頃から大人になった今もずっと仲良くしています。私が赤ちゃんの頃からかわいがってくれて、会うといつも楽しい話をしてくれたり、笑わせてくれたりする面白い人です。でも私は小さかったので、元は男性で生まれてきた人だと知りませんでした。いつもその人は笑顔ですが、裏には色ん

な葛藤や苦しみがあったんだと、母が教えてくれました。小さい頃、男の子なのに女の子の遊びをしたり、しゃべり方が女の子っぽいせいでひやかされたり、嫌がらせを受けていたそうです。自分の気持ちは女性なのに成長するにつれ男性の体になっていくはがゆき、どうしていいのかわからない不安が押し寄せてきて、誰とも会いたくない、人の目線が怖くて泣いてばかりで引きこもってしまった事もあったそうです。その頃、私の母と出会い、友だちになり少しずつ仲良くなって外に出られるようになったと聞きました。母は男だろうが女だろうが関係ないと、いつも言っています。その人の考え方、優しさ、尊敬できる人間力が好きなんだと…。その人も中学生の時に自分のことを差別せず連れ出してくれた母に、感謝しているそうです。見ていて二人は男女関係なく本当に仲がいいなと思います。私が母の立場ならどうしていただろう？母のように接する事ができただろうか？見て見ぬふりをしてしまっんじゃないか？と少し

考えてしまいました。

今は昔と違って、トランスジェンダーの人にとって少し生きやすい世の中になってきたと思います。例えば、学校のランドセルです。今は色々な種類の色があって自分で好きな色を選べます。その他、来年から導入される制服も女子はズボンを選べるようになってきます。昔より男女平等について理解がある世の中になってきた部分もありますが、まだまだ差別は沢山あるように感じます。いろんな考えをもった人がいるので今すぐに差別をなくすことは簡単ではないと思いますが、そんな中でもお互いの考えを聞き出し、ほんの少しでも理解しあえる世の中になるといいなと思います。

世界には沢山のトランスジェンダーの人がいると調べて分かりました。まだまだ理解をしてくれない人もいる為、ずっと苦しんで精神を病み亡くなってしまふ人もいます。また、男の体に耐えられなくなり性転換手術をして命を落としてしまふ人がいることを知りました。その記事を見つけた時、とても腹が立ちました。命の重さは平等なのに、男だとか女だとかで区別され、生きづらさを感じている人がたくさんいるからです。まだまだ本当の自分を隠している人もきつっているのでしょう。そのようなことをなくして一人でも幸せに生きて欲しいと

思います。

そこで、私に何ができるのかを考えました。今の自分は苦々な友だちに冷たく接してしまったり、話しかけてあげられなかったりしてしまいます。自分の中で嫌と感じるだけで、話せばその子のいいところが見えてくるのに、自分でバリアをはって見た目だけで判断している自分に気がつきました。少しずつそういう自分の気持ちを変えなければいけないと反省しています。

幼稚園の頃に好きだった「ありがとうの花」という歌があります。「ありがとうって言ったら皆が笑ってる」なにげなく歌っていたけれど、とても大事な言葉だなと思います。「ありがとう」と言われて怒る人はいないし、言われたらうれしくなるし、みんなが笑顔になる。今回トランスジェンダーのことを調べて、たくさんのごことに気づくことができました。みんなちがってみんないい。

コロナ禍で中々会えないけど、今日も私の母は長年の友と、ここにこ長電話をしていました。

作文を掲載させていただいた方（あいうえお順）

合澤莉々子
（明治北小学校）

眞田 芽衣
（春日町小学校）

深見 麻帆
（南大分小学校）

阿部 栞奈
（大道小学校）

高嶋 怜奈
（下郡小学校）

藤元 結理
（滝尾小学校）

安東 佐帆
（上戸次小学校）

谷口 理
（大分西中学校）

右田大惟樹
（上野ヶ丘中学校）

猪塚 優衣
（明治小学校）

玉ノ井璃茉
（寒田小学校）

宮崎 愛瑚
（桃園小学校）

上原百々花
（大在中学校）

津曲 杏奈
（東大分小学校）

山内凜太郎
（判田小学校）

大野翔太郎
（植田東中学校）

出口優里菜
（植田東中学校）

米村 歩
（長浜小学校）

神河 汐穂
（東大分小学校）

徳丸 慧
（王子中学校）

若林 詩葉
（金池小学校）

川野 陽莉
（森岡小学校）

永田 咲愛
（城南中学校）

久渡 心桜
（大分豊府中学校）

中原 万葉
（大分西中学校）

河野 滉世
（春日町小学校）

拝崎 光佑
（東大分小学校）